

花粉症、がん発症リスクを低減

がん社会 を診る

中川 恵一

今年も花粉症の季節を迎えています。

日本の国土の7割は森林で占められ、その2割弱がスギ人工林、1割がヒノキ人工林です。木材不足の戦後に造林が進みましたが、木材の輸入自由化などで林業が衰退し、放置された森林から大量の花粉が飛散するという残念な結末です。

がんは日本人男性の3人に2人、女性でも2人に1人が罹患(りかん)する「国民病」です。花粉症も日本人の4割

近くを悩ませています。

花粉症の有病率は1998年には約2割でしたが、2008年は約3割、19年には4割強と、継続して増えています。特に23年は多くの地方で平均より花粉の飛散量が多くなっています。

花粉の飛散量は前年の夏の気象が大きく影響します。気温が高く、日照時間が長く、雨の少ない夏は花芽が多くなり、翌春の飛散量が多くなります。22年は梅雨前線の活動

が弱く「高温・多照・少雨」となり、スギの花芽が育つ好条件となりました。

がんは全体で約6割、早期であれば9割が完治します。しかし花粉症は一度発症すると完治はまれ。やっかいな病気です。

がんは遺伝子の「経年劣化」と免疫力の老化によって年齢とともに増える病気です。一方、花粉症が最も多いのは10歳代で、年齢とともに有病率は低下していきます。重症度も同様の傾向があり、年とともに春が楽になったと感じる読者も多いと思います。

そもそも花粉症は、異物に対する免疫の過剰な反応です。年齢とともに免疫力が低下し、症状が収まってくるのは当然といえます。

花粉症の人では、がんの発症リスクが減る可能性が国内外の研究で指摘されていま

す。特に明るい材料なのは、最凶のがんといえる膵臓(すいぞう)がんのリスクが低下するという研究結果が増えていることです。

8つの疫学調査を統合して分析した「メタアナリシス」の結果で、花粉症の人の膵臓がんの発症リスクが、花粉症でない人の57%まで低下していました。北米、欧州、オーストラリアの1万人以上を対象とした調査で、信頼性の高い結論でした。

日本でも群馬県に住む約9千人の中高年を対象に行われた調査で、花粉症を発症している人、がんによる死亡率が約半分になるという結果が出ています。

過剰な免疫反応が起きている花粉症の人では、がん細胞を未然に退治してくれる「免疫監視機構」の動きも強まっています。

嫌われ者の花粉症にもプラスの面がありそうです。

(東京大学特任教授)



イラスト 中村 久美